

釈作業を通して、作品の内容から 大きく以下の三期に分類し、菅原道真の詠作姿勢を探る試みをした。

- 「1・太宰府謫居一期 昌泰四年(九〇一) 春→延喜元年(九〇一) 秋」
- 「2・太宰府謫居二期 延喜元年(九〇一) 初冬→延喜二年(九〇二) 早春」
- 「3・太宰府謫居三期 延喜二年(九〇二) 春→延喜二年(九〇三) 冬」

この分類に属する主要作品を具体的に考察し、その作品論を通してその期の菅原道真の詠作姿勢の特色を概観する。

「1・太宰府謫居一期 昌泰四年(九〇一) 春→延喜元年(九〇一) 秋」

この昌泰四年は七月十五日に「昌泰」が「延喜」に改元されている。(『日本紀略』醍醐天皇・昌泰四年七月十五日の条に、「改昌泰四年為延喜元年」とある。) この年には「敘意一百韻」を始めとする「詠樂天北窓三友詩」「哭奥州藤使君」等二十韻以上の長編の大作が矢継早に詠作されている。いずれも秋までに詠まれたものだと考えられる。右大臣の地位から突如として職を解かれ、太宰府に左遷させられたその現実を直視出来るだけの精神的余裕を持ち得ず、それをどう受け入れれば良いのかに苦悩する、その痛々しいほどの心の葛藤が作品の根底に流れているものが、この期のものと考えられる。

ここでは「敘意一百韻」「哭奥州藤使君」の長編二大作及び「秋夜」「讀開元詔書」「慰少男女」の三首を取り上げて作品論を展開する。